



TWINCLE
Twin College Envoys Program

第 2 章

ツインクルプログラム実施体制



1) ツインクルプログラムとは

ツインクルプログラムはTwin College Envoys Programの略称（Twinkle）であり、「きらきらひかる」これからの時代に先駆けるグローバル人材養成をイメージしてつけたものである。

本プログラムでは逆JETとして多くの学生をASEAN諸国に派遣するとともに、ASEAN諸国からも同数の学生を招聘することで相互の学生交換数を増し、将来的にASEANと日本の架け橋となる若者の早期教育を軸とする交流を実現する。



また、このプログラムが優れている点は、全学体制での実施により千葉大学の理系研究科が構築してきたASEAN諸国の有力大学との連携関係を活用することで、素早く確実にこのプログラムを軌道に乗せ、初年度から十分な成果を上げるように計画されている点にある。したがってツインクルプログラムは教育学研究科が軸となり実施する全く新しいタイプの交流計画でありながら、そのスタート時点から確実なレールの上を順調に進むことが期待できる。これは世界的研究大学を目指す千葉大学の総合大学としての利点を十分に生かす計画と言える。

さらにツインクルプログラム実行性を担保するために新たにグローバルジャパンカリキュラムを開設することで、プログラム参加学生の意識の明確化、受講メリットの確保、成長の評価が確実に行えるプランとなっている。

これらの取り組みによりツインクルプログラム実施により、教育学研究科を含めた千葉大学全体の国際化が大きく前進すると期待される。

2) ツイン型派遣の概要とその全学実施体制概略

はじめにツインクルプログラム一番の特徴であるツイン型派遣の概要について説明する。



ツイン型派遣とは千葉大学の教育学研究科と他の研究科の院生でグループを組み、共に学び、共に教材開発を行い、さらにそのグループがASEAN諸国に赴き、子どもたちに教育活動を行うこと。

科学研究に強みを持つ院生と教育実践に強みを持つ院生との協働が、ASEANでの教育体験の中で化学反応を起こし、グローバル感覚を持った教員と教育マインドを持った研究・技術人材という2つの人材を1つのプログラムの中で養成・開発することを目的としている。

図に示すように両分野の院生がそれぞれの強みをいかし、先端科学トピックを教材化する。さらに国際教育センターより提供される日本語・日本文化教育プログラムを活用し、ASEAN諸国の子どもたちに科学技術を通して日本文化を伝える授業へと発展させる。

院生グループはASEAN諸国の受け入れ大学に赴き、各拠点大学とともに連携する小中高校で子どもたちに対し実験を主体とする科学の授業を行う。この授業体験を通して、日本を伝えるとともに院生自らにもグローバル人材としての自覚を目覚めさせる。

なお実施に当たっては、国際教育センター、インターナショナルサポートデスクが渡航前安全教育を含め、危機管理を支援する。また、ASEAN諸国の受け入れ大学は、連携する小中高校との実施調整を担当する。さらに現地での様々なサポート活動はASEAN諸国にある千葉大学IECオフィスのスタッフとともに、現地コーディネーターを起用し、実施する。

3) ツインクルプログラムの質の保証

ツインクルプログラム実施にあたり千葉大学は以下の5つの方法によって質保証体制を確立している。

1. グローバルジャパンカリキュラムの開設



本カリキュラムは大学院と学部の方で行う特別授業であり、渡航前教育、現地での教育体験、事後評価でカリキュラムを構成している。

渡航前教育としては院生がグループで授業開発を行うための授業研究、外国語能力を向上するための授業、現地での教育活動のための日本語、日本文化教育を開講している。その後ASEAN諸国の小中高校での教育体験を実施する。ASEAN諸国での活動は帰国後、報告会において発表し、その内容を評価する。さらに外国語能力の達成度をTOEICにより評価する。

この結果、グローバル人材として十分な能力ありと認められたものには、受講証明を行う。

2. 柔軟性をもったコース設定

ツインクルプログラムでは計3パターンのコースが設定されている。派遣期間が2週間のトライアルコースおよび1か月のショートコースを設定することで、より多くの学生がこのプログラム参加することを可能にしている。これらに加え、トライアル・ショートコース経験者が、より広がりのある、現地での教育体験、研究活動のために挑戦する6ヶ月間のロングコースを設けている。

3. アカデミック・リンク・センターを活用したアクティブラーニングの実施

③アクティブラーニング

アカデミック・リンク・センターと連携し、自由な学習空間、学習のためのコンテンツ、人的サポートを組み合わせた新しい学習環境の下、アクティブ・ラーニングを主体としたプログラム運用



受講学生が主体的に現地文化理解、教育準備活動に取り組むことで、現地での活動成果の高まりが期待されます。

4. 実践的英語教育プログラムの拡大

④実践的英語教育

千葉大学が開発した「コンピュータを活用した外国語教育システム(CALL)」や、学生が寛ぎながら、英語を話す・英語で学ぶ・発信する場—イングリッシュ・ハウス—を活用して英語力を強化



グローバルジャパンカリキュラムでの英語教育に加え、千葉大学が開発したコンピュータを用いた学習システム「CALL」、常に生きた英語に触れられる空間「English House」を活用しグローバル人材としての英語力を高める。

5. プログラム実施責任母体としての教員養成開発センターの開設

以上に述べた質保証体制によって、本プログラムを確実かつ効果的に実施する。

4) ツインクルプログラムでの現地教育活動の考え方

次にコース設定の詳細を説明する。

トライアル コース 2週間	ワークショップ日本 週5日15時限×2週間 グローバルジャパンカリキュラム として4単位	ジャパンデーを開催 日本文化 週末のプログラムで 日本文化体験	日本語	学部
ショート コース 1ヵ月	ワークショップ日本 週5日15時限×1週間 グローバルジャパンカリキュラム として2単位	日本文化 週1回2時限×4週間 日本文化解説として2単位	日本語 + 提携大学での授業単位を互換 現地の言語の学習も互換対象	学部 大学院
ロング コース 6ヵ月	ワークショップ日本 + 提携大学での授業単位を互換 現地の言語の学習も互換対象 現地語の修得を強く推奨	日本文化 週1回1時限×16週間 日本文化解説として2単位	日本語 週1回1時限×16週間 日本語解説として2単位	大学院

前述のようにツインクルプログラムにはトライアル、ショート、ロングの3コースがある。トライアルでは科学技術を中核とする日本文化体験、ショートではさらに食文化、生活習慣などの日本文化教育をします。ロングコースではこれらに加え、日本語授業を定期的に行い、日本理解を浸透する。

以下にトライアルコースの1例として「植物の未来」をテーマにしたボゴール農業大学との連携プログラムの内容を説明する。園芸学研究科で研究している植物工場を教育学研究科院生とともに教材化し、この過程にASEAN諸国からの留学生が参加することでより実効性の高い授業内容へとブラッシュアップする。さらに国際交流センターが食文化教育などのプログラムを提供し、院生らはこれらを合わせて総合的な授業を開発し、授業計画を作成する。院生らはこの授業を持ってインドネシアに渡り、ボゴール農業大が連携する高等学校で教育活動を行う。このようにして千葉大学

派遣の学生がASEAN諸国の子どもたちに日本を伝える活動を行うというのがトライアルコースでの活動内容である。

5) ツインクル実施に向けた過去の取り組み

ツインクルプログラムを計画するに至った経緯として、教育学部・研究科がさまざまな若者支援の教育プログラムを開発し、日本の中高校生へ働き掛け、理系人材育成を支援してきたという経緯がある。ここで、これらの取り組みのうちでも特にツインクルプログラムに関連する先行研究として、本プログラム開発のベースとなっている人材養成プログラムを示す。



千葉大学教育学部ではJST受託研究、未来の科学者養成講座の取り組みを通して、さまざまな理系出る杭人材育成プログラムを実施しており、先端科学をもとにした小中高校生向けの実験講座を多数開発している。すでに我々が実施した講座に600名以上の受講生が参加しており、受講生は国際科学オリンピックで銀メダルを獲得するなど、多くの成果を上げている。

また、シンガポール国立教育研究所との連携により英語での実験学習教材の開発をすすめ、これまでに8講座を実施してきた。さらに今年度からはプノンペン大学、北京師範大学等との連携で各国の現地語でのプログラム開発に着手している。

6) グローバル化へのこれまでの取り組み

すでにおこなってきた教育学部・研究科の学生教育のグローバル化への取り組み支援としては、交換留学は毎年3名程度の、また、語学研修や国際交流事業などで60名程度の日本人派遣の実績がある。さらに自主的に東南アジアを中心とする発展途上国の海外ボランティアへの参加も各年度30名以上おり、これらの実績のもとに、更なる飛躍のためツインクルプログラムを構想した。

7) ASEAN諸国拠点大学との連携体制

また、本プログラムに参加を表明しているASEAN諸国の拠点大学は、この図に示すようにインドネシア、タイ、ベトナム、カンボジア、シンガポールの協定校はいずれも各地域のトップ校である。さらにこれら拠点大学と連携する小中高校を逆JET活動の場として確保しており、スムーズな実施が可能となっている。

逆JET活動先の確保

○千葉大学海外校友会、在籍している外国人教員、海外IECオフィスが、それぞれ現地協定校等の現地ネットワークを駆使して活動先を確保、また海外協定校の附属学校も活用

⇒ 既に活動先として約20の小中高校を確保済み

インドネシア

インドネシア大学
バンドン工科大学
ガジャマダ大学
ウダヤナ大学
ボゴール農業大学

歴史ある伝統校



インドネシア教育省及び協定大学担当者会議
2012年12月20日ウダヤナ大学にて

タイ

マヒドン大学
カセサート大学



ベトナム、カンボジア

ベトナム国家大学
ハノイ校教育大学
王立ブノベン大学



王立ブノベン大学学長、副学長、
理学部長との交流協定調印および実施会議

ナンヤン理工大学
国立教育研究所

シンガポール

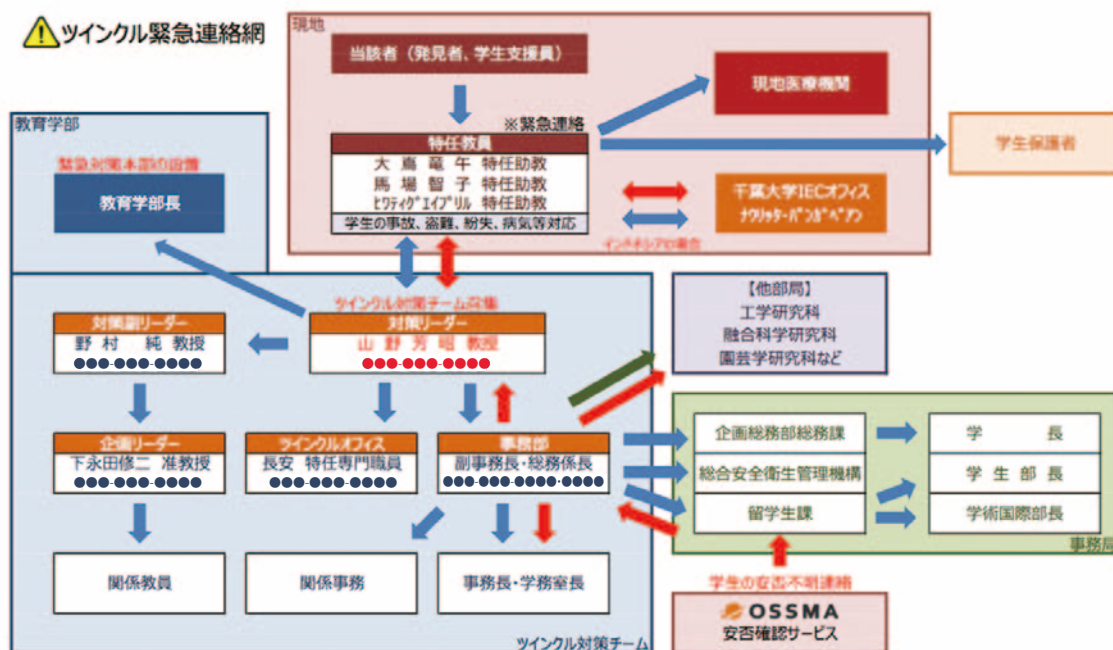


8) 学生派遣時の始動と危機管理体制

現地の支援体制としては、インドネシアのIECオフィスには専任スタッフがおり学生の活動を支援している。さらにツインクルプログラムで拠点大学にコーディネーターを配置しており、どのような状況に対しても的確に対応可能な体制を整えている。さらに、特にトライアル・ショートの派遣期間は多くの学生が渡航するためツインクルプログラム担当特任助教が現地での生活・安全面を含め直接指導する。また、日本からは指導教員がテレビ会議システムにより教育指導を行い、教育の質を保証する。

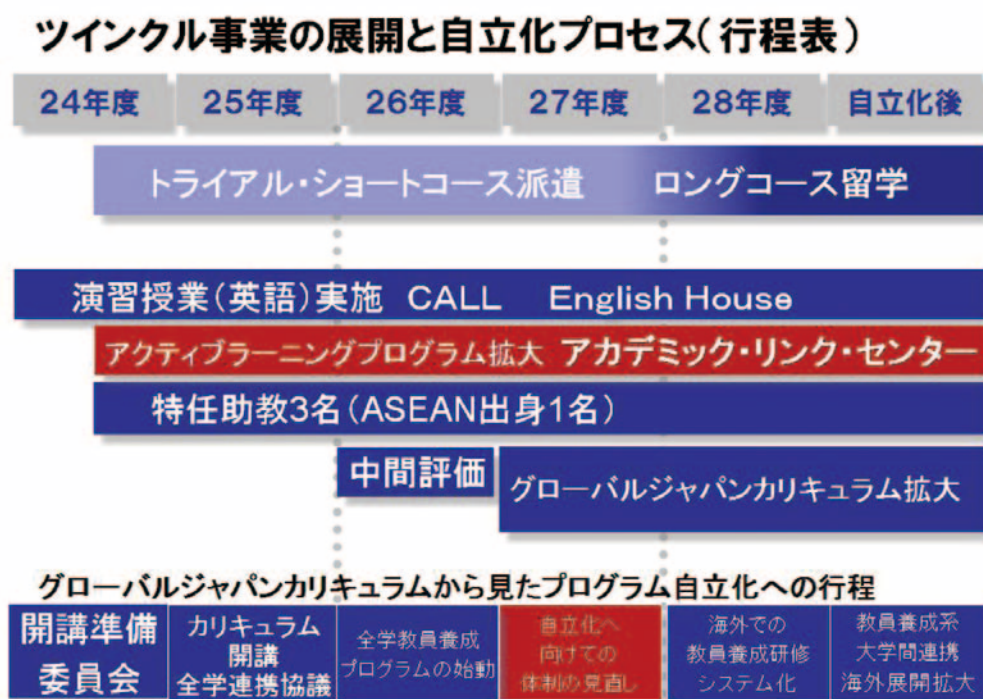
学生の派遣・活動状況に関しては、教育学部ツインクル緊急体制により学生の不意の事故や体調不良に対応するとともに、ISDが情報の一元管理を行い、迅速で的確な支援体制を取っている。これらに加えオズマ活用によりセキュリティ管理の一層の強化を図る。このように複数のサポート体制により十分な安全を確保している。

このようにプログラムの実効性を高め、受講学生の学習効率を高めるために十分な指導と安全管理が図れるよう幾重にも指導・支援の人員を配し、万全の体制をとって実施している。



9) ツインクルプログラムでの事業展開と自立化のプロセス

ツインクルプログラム支援期間全体の計画については、既にグローバルジャパンカリキュラムの準備が進められており、平成24年度から学部では正式な授業科目として開講されている。研究科についても試行として平成24年度は実施され、平成25年度から正式に開講予定である。本プログラムでの学生派遣は毎年80名を計画しており、支援期間全体では360名の派遣実施を計画している。



図のように平成24年度及び25年度はトライアルコースおよびショートコースを中心に実施し、その後ロングコースへと拡大する。

English Houseでの生きた英語体験、CALLによる学習体制の強化を行っています。さらにアカデミック・リンク・センターでのアクティブラーニングにより自主的取り組みを推進している。

中間評価ではトライアル・ショートコースでの派遣による成果を検討し、プログラムの実行性がさらに高まるように取り組みたいと考えている。

図の一番下にグローバルジャパンカリキュラムを中心とした本プログラムの自立化へのプロセスを提示した。このように堅実に体制づくりを実行し、自立化後は、ツインクルプログラムが日本の教員養成のモデルの一つとなることを目指している。

ツイン型学生派遣プログラムのアウトカム

プログラムの成果

大学間交流プログラムの先導モデル

国際化の加速、大学間の国際連携強化、
国際教育活動の充実、留学生数増

⇒ASEAN諸国における初等中等教育・高等教育
双方の教育活動の中心的拠点構築

グローバルマインドを持ったリーダー教員養成

⇒日本における教員養成の革新

日本ファンの獲得、日本との交流拡大

⇒日本経済等の持続的発展に貢献

